

やはり俺が家出女と仲  
良くするのはまちがっ  
ている。

幅滝翔

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

中野二乃と中野五月が家出した時のこと。中野五月は上杉家に行ったけれど、中野二乃は怒りに任じていたら比企谷家に辿り着いてしまう。そこで起きるストーリー。(数話にする予定)

# 目次

3 日目	2 日目	2 日目	2 日目	1 日目	1 日目	1 日目	1 日目	家出人？
①	③	②	①	④	③	②	①	
72	62	50	42	35	26	17	8	1



# 家出人？

とある日の小町からのメール

差出人：比企谷小町

宛先：比企谷八幡

知らない人

お兄ちゃん、買い物先で仲良くなつた女の人と一緒に家寄ることになったから！もうすぐで買い物終わるから、小町たちが着く前に、飲み物とか用意してね。

—————

は？ちよつと小町ちゃん、お兄ちゃんよりコミュ力が高いのは羨ましいけどね、さすがに知らない人を家に連れてきたらダメでしょ？常識だよ？あと、どういう話したら家来ることになるんだよ！知りたいわ。

ん? あ、このメール30分前じゃん。やべえ、小町に怒られる…

ピンポーン

あ、オワタ。

「お兄ちゃん、ただいまあー!!」ニコニコ

「お、お邪魔します」

「ん? あれ、お兄ちゃん居ないのかな? まあ上がって行ってください」

「あ、ありがとね」

良かったあ、急いで準備したけど大丈夫だったぜ! 八幡たら天才!! 飲み物は自販機のやつをコップに移して、お菓子は適当にあった焼き菓子でも出しとけばOK! え、ペットボトルのはダメって? それは気にしない気にしない。

ん、ちよつと待てよ……女の人って書いてたから勝手に年上かと思ってたけど、声質的に年下っぽいな。挨拶だけしたら自分の部屋に籠ろう!

「あ、お兄ちゃん居るじゃん! 居たなら返事してよねー」

「あ、おう」

「つ!!……………あ、初めまして」ペコ

「うん、挨拶はいいけどね、初対面の人の顔を見てびっくりするのは失礼だと思わない? ショックで泣くよ、俺」

「お兄ちゃん、初対面の人の前で泣くのもダメだと思うな……まあそれは置いて改めて自己紹介しましょうか」ニコツ

置いてくのかよ、うわあーんうわあーんって泣くぞごら！

はい、気持ち悪いですねごめんなさい。

ゴホン、まずはこの人の事で分かったことを挙げよう

①名前は中野二乃というらしい↓ほう、聞いたことないな（当たり前）

②住んでいるところは愛知県らしい↓え、遠すぎやろここ千葉やぞ？まあ新幹線とかでちよちよいのちよいか

③五つ子の姉妹らしい↓は？初めて聞いたぞ、その言葉。お母さん大丈夫？

④ツンデレ↓そ、そうか

⑤姉妹思い↓良い奴じゃねえか

⑥家出した理由は、みんなが家庭教師の味方をするから↓え、いい事じゃないのか？知らんけど

⑦千葉に居た理由は、怒りに任せて電車に乗ったら、いつの間にか居たらしい↓いや、普通に考えてすごいな。愛知から千葉って結構あるぞ距離。もうその間を知らないことがすごい

⑧ お金が見当たらないらしい↓行き運賃しかなかったのか、泥棒に取られたのか。まあどっちにしろ可哀想だな

⑨ 親に言ったら、どっかで数日間泊まれる許可を得たらしい↓ん、もしかしてここに泊まる気か? 嫌な予感が…

「———ということで、お兄ちゃん! 今日には二乃さん泊まって行くから」(お姉ちゃん候補が増えたなあ) ワクワク

「(予感的中……)」

「あ、小町ちゃん? 寝る時ソファアの上でいいからね」

はあ、俺のどこ使わすか。お客さんだししようがないな……嫌だと思うけど我慢してくれんことを願う。ていうか小町よ、そんなに睨まないでくれますか? 今すぐ言うから。あれ、笑ってる? どっちだよ

「あー、中野さん? 嫌だと思うけど俺の部屋使っていいから。いやむしろ使え! 後々小町になにされるか分かんないし」

「アン……、あ、貴方ってシスコンですか?」

アン? なにを言いたかったんだ? もしかしてアンタって言おうとしてたのか? それ



ともアンゴラ！て言おうとしてたのか？まあどっちにしろ嫌だけど。

「シスコンじゃねえし、妹が可愛くて好きだけだし」

（いや、それをシスコンって言うんだけど、、、）ボソッ

「ん？（なんだったんだ？）まあそれはどうでもいいけどさ、この家ではいつもと同じ感じで過ごしたらどうだ？」

「え？いや、でも……」

「変に敬語よりいつも通りの方が、俺もそっちもWinWinになるだろ？疲れるしな」  
「……分かったわ、いつも通りに過ごさせてもらうから。よろしくね」

oh……一瞬雪ノ下の感じがしたぜ。雪ノ下と川なんとかさんの合体Ver.か  
？要らねえぞ、それは

「アンタのことは八幡って呼ばせてもらおうわ」

oh……こいつもしやリア充か？いやリア充だな。

会って間もないのに名前呼びとかやっぱリア充じゃねえか！リア充滅べ  
「代わりにアンタも私のことは二乃って呼んでね」

は？ひ？ふ？へ？ほ？……危ねえな、驚きすぎて変なこと言いそうになったじゃねえか。誰が初対面の人の名前を、下の方で呼ぶんだよ！俺にそんな適正はねえ、ここは普通に断ろうか

「ごめんなさい、普通に無理です。恥ずかしすぎて死んでしまいます」

「お兄ちゃん、呼んであげたらいいじゃない」

あ、小町のやつ居たんだ。普通に忘れてたぜ、もう少しで殴られるか絶交されるかになるとこだったわ(?)

でもね、さすがの小町ちゃんのお願いで無理なものは無理なんですよ。だから俺がここで言うのは――

(言わないとお兄ちゃん、この家から追い出すよ?) ボソツ

いや、え、マジで?じゃあお兄ちゃんもう一択しか選択肢ないのかよ…悲しいなあ。言いたくないけど、言わないと小町に追い出されるからな、これは仕方ない。奉仕部の面々にバレなきやいい話だ。主に雪ノ下な、雪ノ下に見つかったらめんどくさいからなあ、色々

「分かったよ、言えばいいんだろ?あ、まあ数日間よろしくな、二乃」

「分かればいいのよ」

「…」

あんれー、おかしいな。なぜ上から目線なんだ?一つ年下だろアンタはよ。目上の人を敬えって習わなかったのか。え?あいつ同級生だつて?ふーん、え、マジかよ…

こうして俺の謎の1日が始まるのであった。  
リア充爆発しろ！

## 1日目 ①

私は中野二乃。五月とあんな事があつたから家を出たんだけど、まさか千葉県に来てしまうなんて……お父さんになんて言われるか……。

まあそんなこんなで比企谷家、小町ちゃんの家に住るんだけどね？私と同じ歳の兄、結構なイケメンなんだけどね……目がダメよね、目が！まあ私のタイプでは多分ないけど。今はその兄の部屋で寝させて貰つてるわ。この部屋に住ると思ったことまとめてみるわ。

①私の部屋と同じくらい綺麗、男子にしてはやるわね……

②小説が多いわね、本棚の全部がラノベなんですけど。

③携帯があつたからこそり連絡先だけ見たら、小町ちゃんと両親くらいしか居ないんですけど。あ、でもゆいっていう人が入つてたわね。誰なんだろう……彼女さんとかだつたらなんか申し訳ないわ。あ、みんなは人の携帯を見るとか真似したらダメよ？私は気になつただけだから……そう、気になつただけ……

あ、もうこんな時間だ。小町ちゃん起きてるかしら、それか八幡の方は起きてない

……わね。てか、マジでソファで寝てるじゃない。それも毛布も何も掛けないで……これじゃ風邪引いてしまうわね。よし、上の部屋にあった毛布持ってこよう。

ふう、これでいけるかしら。こう寝顔を見たら普通のイケメンなんだなあ……って私、何考えてるのかしら！別にタイプでも好きでもないのに……。ていうか昨日の私は、なんで小町ちゃんの兄のことを下の名前で呼ぶことにしたのかしら？全然覚えてないんですけど……。

「うーん……ああー！」

八幡君起きた……ん？どうしたんだ……って、うなされてるじゃない、それもすごい汗！なんで？あ、小町ちゃん！

「おはようございます。早いですね二乃さん！ご飯もう作ります？それともお兄ちゃん起こすのを手伝います？」

「うん、おはよう。八幡君、なんかうなされてるけど、どうすればいいかな？」

「うーん……まあお兄ちゃんの手を繋ぐか抱きつく、そうすれば収まると思いますよ？多分」ニコニコ

ん？気のせいかな、さすがに昨日会った人にそんなこと言わないよね？それにニヤニヤしすぎだよ？念の為聞き直しますけど、

「ごめん小町ちゃん、もう1回言ってくれない？」

「だ・か・ら手を繋ぐか抱きついてください！って言ったんですよ  
やっぱり?!

「嘘……でしょ？な、なんで好きでもない人にそんなことをしないといけないのよ！」

「あーあ、どうしよつかなあ。小町はご飯の準備しないといけないし、誰か兄の面倒見てくれる人いないかなあ……」

「料理なら私が」

「……」 チラツ、プイ………。チラツ

「小町ちゃんがやる方が早いんじゃない？料理なら私がやるからさ」

「(？・ω・?)」

「………」

分かったよ、やればいいんですよ？小町ちゃんにさせられてあげるわよ！あ………なに  
をしたらいんだろう、こういうことしたことないから分かんないわ。うーん、じゃあ  
抱きつくのは無理だから膝枕と手を繋ごうかしら………。

「分かったらいいですよ、二乃お義姉ちゃん」ニコツ



『あいつよう来れるな、比企谷菌』ヒソヒソ

『ホントな、折本さんにあんな事したくせに』ヒソヒソ

『比企谷菌近寄るな』

『比企谷菌、比企谷菌！』

比企谷菌比企谷菌比企谷菌比企谷菌比企谷菌比企谷菌比企谷菌比企谷菌

比企谷菌比企谷菌比企谷菌比企谷菌比企谷菌比企谷菌比企谷菌比企谷菌

比企谷菌比企谷菌ヒキガヤキンヒキガヤキンヒキガヤ

うわあー！うるせえ！なんだよ、この夢は。俺だつて……俺だつてな！やりたくてやってるんじゃないやねえよ！この方が効率がいいからやってるんだ。だからそんなに言わなくても……。

あれから結構な時間が過ぎた。もう、いいか。逃げよつかなあ……俺が居なくなつても悲しむ奴なんて……あ、小町が居るか。うーん、どうしようかなあ……



は……………て……………よ!

ん、はてよ…?なんだそれ?もしかして俺を呼んでるのか。それともいじめに来たか? うーん、でもそんなことする奴いたっけ?

八幡君……………朝よ!

ああ、もう朝なのか。あ、てかこの声って、昨日来た中野二乃っていう人と同じ声だな……………。はあ、起きるか……………。朝ご飯食べないといけないし。目を開けるとするか

「八幡君起きて!朝よ!」ユサユサ

「……………ん……………ん……………は?」

なんということでしょう。朝、目を覚ますとそこはソファではなく二乃さんの膝ではありませんか。なにこれ、なんのラブコメ?え、あと手も繋いでるじゃありませんか。やばい、どんだん恥ずかしくなってきた……………

「あの一、もう起きるから手離して欲しいんだが…」

「え、あ、うん」

「あと、出来たら撫でるのも辞めてほしい」

「あ、ごめん。ていうかもう大丈夫なの？」

「なにが？」

「八幡君結構うなされてたからさ、気になっただけ」

「あー……………大丈夫だ」

「ふーん、そう。あ、ご飯出来てるって」

怪しいわね……………

「ん、分かった」

く朝食中く

「モグモグ」

「モグモグ」

「モグモグ」

「そうだお兄ちゃん」

「ん、なんだ小町？」

「二乃さんの勉強見てあげてね」

「は？（え？）」

「いやいや……なんで俺がそんなことしないといけないんだよ」

「まず小町ちゃん、なぜ急に朝ごはんの時にそんなこと言うの？」

「二乃さん、勉強出来ないんでしょ？」

「うっ！で、でも八幡君に迷惑かけたくないっていうか、休憩も大事っていうか……ね？」

「それなら全然使ってくれていいですよ？兄は暇だし」

「おい！兄の予定知らねえ癖に決めつけんじゃねえよ」

「二乃お義姉ちゃんのお父さんの中野マルオさんと家庭教師の上杉風太郎さんっていう人から勉強させるように言われているので」

「ガーン」

「無視ですか……ん？親と家庭教師の命令か。それなら仕方ないか……。はあ」

「じゃあお兄ちゃん任せたよ！」

「ん、了解」

ガーン……私ここに逃げて来た意味無くない？せつかくこの家でダラダラ過ぐ……休憩しようと思ったのに！小町ちゃんとアイツのせいね、許さないわよ！あと八幡君はもつと断ってくれたっていいのに！これじゃもう逃げ場ないじゃない！ぐぬぬ、覚えて

おきなさい！3日後八幡君の予定満タンにしてあげるわ！

## 1 日目

## ②

今日は長くなりそうだな。なんで俺がアイツの勉強見ないといけないんだよ！でもアイツの親？から言われてるんじゃないや断れないな……いや、ね？二乃の奴だけから言われてたら断ってたかもしれないどき、親からなんてさすがの俺でも断れねえしな……もうやるとするか俺の部屋で。

「おい二乃！勉強道具はあるか？」

「無いに決まってるじゃない、なんのために家出してきたのよ」

「……………」

そうだった！こいつ家出してたんだった。まあ俺の去年の奴貸すか、…、あれ、どこやったつけ??そうだ、テストはいつなんだろう、勉強の時間している時間はあるのか？

「おい、テストはいつだ？」

「……………」 プイツ

え、なんで言わないの？それとどこ向いてんだよ、棚見てもラノベしかねえぞ?……もしかしてもうすぐテストの日だから言えないとかか？明日か？それはそれでやべえぞ、いつ帰るんだよ！間に合うのか？

「もしかして明日じゃねえだろな？」

「フルフル

「……違うのか？じゃあ教えてくれよ、それによつて勉強の仕方が変わるから」

「……1週間はとつくに切つてるわよ」

「は？」

嘘だろ、明日じゃなかったのは良かったけど1週間はねえのかよ。じゃあ今からワークをしてもらうか……。遅いと思うけど？。

「よし、あった！じゃあまずこのワーク5冊の中からテストに出るところやつとけ。どんなことができるか分かんねえけど」

トコトコ……トスツ……ペラペラ……カキカキ……

「八幡君、ここ教えてくれないかしら」

「はや?! まあいいけど……って、え？これって……高一の時習うと思うけど」

「しようがないじゃない、分からないんだから」

「……テストの点、中間の時は何点だ？」

「国語が13点、数学が19点、英語が43点、理科が28点、社会が14点よ」ドヤア

「お、おう……そうか」

普通にやべえぞ、英語は二乃に任せるとしても他をどうするかだな……間に合うかこ

れ?あ…学校の存在忘れてた!

「二乃、今から俺学校行つてくるわ」

「え、あ、そうだったわね。ごめんなさい私のせいで……9時になってしまつて」

「まあ俺は平気だけどな……あと謝るな。二乃のせいではないからさ」ナデナデ

「ちちちちよつと!急に撫でないでよ!」

あ、やらかしちまつたな……小町の時の癖で二乃の頭を撫でてしまった。あ  
ちやー、顔真つ赤だ。俺怒られるな。よし謝ろう!

「あ、すまん……お兄ちゃんスキルが発動しちまつた」

「お兄ちゃんスキル?」

「ああ、小町が泣いている時や困つてる時に撫でると喜んでさ、それがなぜか発動し  
ちやつたつてこと、ごめん嫌だつたら?頭撫でられるの」

「…撫でられるのは別にいいわよ。気持ちよかつたし」ボゾツ

「ん?なんか言つたか?」

「な、なにも!じゃ、じゃあいつ帰ってくるの?これ教えて欲しいんだけど!」

うーん……そこなんだよな、どうしようか。学校に連れていった方がいいんだけど。  
許可下りるかなあ?まあその時はその時だな

あわわわわわー！！！！撫でられたー！！ど、どうしよう……。なんでこんなに私の心臓はドキドキしてるの？八幡君には昨日会ったばかりだしこんな感情湧かないはずなのに。……：ていうか昨日会ったばかりでこんな感情湧くって私こんなにチヨロかったっけ？ま、まあ上杉の奴よりは優しいしかっこいいけど……。ううう！でも、4日後には帰るから言わない方がいいのかしら……

「おい二乃！」

「ひ、ひゃい！」

「あー、一緒に学校行くか？許可下りるかは知らんけど」

「え、いいの？」

「まあいけるだろ、平塚先生に言ったら」

「平塚先生？」

「まあ会ったらわかるぞ、じゃあ準備するか。二乃も行く準備しといてくれ」

「あ、うん……」



よし、平塚先生にも事情を書いたメール送ったからいけるだろう。学校の準備はもう昨日やつてるからそれを出すのはいいとして、二乃の準備だな。服はもうそのままとして筆記用具は全部俺と同じでいいか。あ、終わった。

じゃああととは許可が下りるかどうかな。っ！よし、先生から来たぞ。なになに、

『遅刻の理由は後で聞くとする。あと、女子を放課後まで学校に居させれるかだど？そんな嘘打ってる暇あったら早く来い！』  
追記：一応許可証を出しておく。一応

だからな？後々面倒くさくなるのは嫌だし』  
全然信じてくれねえじゃねえか！というか出してくれるのは嬉しいが本音出まくりだぞ……。大丈夫かあの先生は

「はあ……………二乃行くぞ」

「うん」

あの後、二乃と一緒に学校行ったら平塚先生に驚いてた。遅刻した理由言ったら『勉強教えるのはいいことだが曜日は間違えるな』って言われた。はい、ごもつとものです。

二乃は会議室で平塚先生と勉強している。俺はというと自分の教室の扉開けて視線

がたくさん来たから、授業の先生に遅れたことを伝えて寝たぜ！まああまり寝れなかったけど……………

よし、もう昼休みか。あ、お金持ってくるの忘れちゃった……。最悪だ！どうしよう………ん？メールか、誰からだろ？

差出人：中野二乃

宛先：比企谷八幡

件名：弁当

今から会議室に来てね。弁当は私が持ってきてるから

Wow…いつの間に作ってたんだ？そんな素振りなかったような。まあ飯があつて良かったけど。…………あれ、いつの間に交換してたんだ？した覚えがない、、、まあいい

か。

「ヒツキー！」

「うお！……なんだ由比ヶ浜かよ。どした？」

「昨日の依頼なんだけどき、分かった？」

ん？依頼なんかあったっけ？ああ、葉山の依頼か。二乃のことで忘れてたわ。

「すまん、普通に忘れてたわ」

「なにやってるのヒツキー！授業中ぼーっとしてたからそれを考えてると思ってたけど」

考えてたぜー！二乃の勉強のことをな

「あ、じゃあご飯食べながらゆきのんと話し合おうよ！」

「あー、すまん。ご飯は一緒に食べる奴が居るから無理だ」

「ヒツキーっていつも一緒に食べる人って居ないよね？」

「……。今週だけ居るんだよ」

「今週だけ？……誰なの？教えてヒツキー！」

うーん、とてもめんどくせえ。放課後奉仕部に二乃を来さすか

「放課後教えるからな！じゃあ」

「あ、ヒツキー！」

あの後なんか聞こえたような気がしたけど無視した。急いで会議室に行ったら二乃と平塚先生が仲良く喋っていたな。なんか平塚先生の顔がニヤニヤしてたけど……

「八幡君弁当あるわよ」

「おう、サンキュー。……ん？これって二乃が作ったのか？」

「そうよ。朝ごはん食べた後にすぐ作ったの」

「ん、ちよつと待て！なんで学校行くことその時点で分かっているんだ？まだその時は学校連れていくとか学校あること言ってなかったけど」

「小町ちゃんが学校行ってたから、八幡君もあるんだろ？なあと行って弁当は一応作ってたの」

「じゃあ二乃と平塚先生の分はどうした？自分のは分かるが平塚先生のこと言ったの行く数分前だぞ？」

「ああ、えつと……………」

「私が家庭科室の使用許可を担当の先生に聞いて出した。まあまさか私の分も作ってくれるとは思ってなかったがな」

「な、なるほど……？」

（大丈夫なのか？それは）

「じゃあ早く食べましょう」

「「いただきます！」」

あむ……つ、美味しい!!!小町の料理とほぼ変わらないじゃねえか。いや、ワンチャン小町のよりも上になるくらいだ……。二乃の旦那になる奴が羨ましいぜ！」

／／／／／

「……………比企谷、言葉に出てるぞ。まあ私もそう思うがな」

「ん？なにがです？」

「(。皿)」

「嘘だろ？比企谷……………」

2人ともどうしたんだ？急にこっち見て。俺なにも喋ってないけどな……。も、もしかして言葉に出てたのか？で、でも恥ずかしいことなんて言った覚えが……。ていうか話変わるけど平塚先生、『私も料理が出来ていれば結婚できたのかな、、、』って言葉めっちゃ出てますよ？早く誰かもらってあげて！

この後、放課後の奉仕部に二乃が来てくれることになった。あ、やべ。早く二乃に合う勉強を考えないとなあ……。

## 1日目 ③

結局、勉強の方法を思い付かず放課後になってしまった。もう雪ノ下にも頼るかも……。

「——ツキー！」

由比ヶ浜には……まあいいか。あ、早く会議室に行かないと。二乃の奴時間にとても厳しいからな、説教も地味に長いし。平塚先生と変わんないような気がするな

「ヒツキー！」

「うお！なんだ、由比ヶ浜か。何の用だ？」

「ヒツキー大丈夫？なんか考え事してたけど」

「ああ大丈夫だ！じゃあな」

「ちよつと待つてよ！一緒に行こうよ」

「あー、昼休み言つてた子連れてこないといけないから……先行つといてくれないか？」

「あ、そんな事あったね！わかった、ゆきのんと待つとくからね！」

ええ、忘れてたの？それじゃ言わなければ良かったぜ……あ、でも雪ノ下にはすぐバレるな

「八幡！」

「……」

オ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、イ、なぜ来た。今から行くとしたのに。後、そんな大きい声で言ったらクラスの人が気づくだろうが！ほら、至る所から

「八幡だつてさ、アイツの彼女か？可愛いじゃねえか？」

「あの彼女ヒキタニでは釣り合わねえじゃねえか？」

「彼女は雪ノ下さんと由比ヶ浜さん以外だったのね」

「リア充〇ね！」

「リア充爆発しろやゴルア！」

と荒れまくつてるじゃないですか。良かった由比ヶ浜が居なくて……あ、後で言わないといけないじゃん。ベー！そりゃないわ。まあまずはここから逃げ出すとするか

「二乃、とりあえずここ出るぞ」

「うん」

「うおー、下の名前で呼びあつてるぞ！ヒキタニ君も男だなあ」

「俺らより先に彼女出来るとか、、、羨ましいぜ！」

「リア充爆ぜろ！」

「見直したぜ！ヒキタニ君を見習わないとな、みんな！」

「「そうだな（ね）！」」

なんか聞こえたけど今はそれどころではない。早く誰も居ないところに行かないと！  
俺のベストプレイスでいいか。

---

「おい、二乃！さっきのはなんだ？」

「何って……別に困ることしてないからいいでしょ？」

「困るわ！さっきのあれのせいで俺らがつ、付き合ってるって噂が広まったらどうするんだよ」

「別にいいじゃないの？噂を気にすることないわ」

「いや、二乃は嫌だろ？こんな俺とそのあんな噂出て」

「私は別にいいわ」

「え、あ、そうなのか？……ってそれはいいとしてもだな！俺の高校生活が賑やかな方向になっちゃダメじゃねえか！静かに過ごしたかったのに」

「まあ私には関係ないわ、土曜日には帰るんだから」



「

話噛み合ってるかこれ？あと、それ一番困るやつじゃねえか。噂出した本人がすぐ居なくなるってよお。噂の後始末は俺がやれと？……もう俺もどつかに引つ越そうかな。

はあ今から奉仕部行きたくねえ。あ、噂が広まる前に行く手もあるな！よしそれで行くう！

「よし、今から奉仕部行くぞ！」

「……？まあいいけど。ていうかその奉仕部ってどんなところなの？」

「えっと………部長に聞け。もうすぐ分かるから」

「分からないのね」？

「

決して分からないのでは無い。言いくいだけだ。そう、言いくいだけ

よし、やつと奉仕部に來れたぜ！噂が広まってなかつたらいいんだがな。ところで俺は今、非常に左腕が重い。なぜだと思う？それはね…

「おい、なんで腕組んだ？余計あの噂の信憑性が高まってしまったじゃねえか！おかげで、通り過ぎる人たちから変な目で見られたんだが」

正解は腕を組まれたということである。めっちゃ恥ずかしい。あと目線がキツイ……。でも嫉妬の目がなかったなあ。逆に尊敬してるような目で見てくるし、男どもが。なぜだ？

「別にいいじゃない。減るもんじゃないでしょ？」

「そういう問題じゃないんだが……」

↳二乃side↳

きやー！八幡君の彼女ですって。言われた時、嬉しかった。ん、ということはそのうちのことなのかしら。でも想いを伝えて離れ離れになってしまうのなら言わない方がいいのからね……まあ言わない代わりに腕組めたからいいわ。

「おい二乃、扉開けるから腕解いてくれない？」

嫌よ。

「嫌！」

「嫌って……でもな？」

「お願い……」ウルツ

「ぐっ……」

あ、八幡君には効果抜群だったかしら？もつとからかいたいけどこれくらいでいいか

しらね。あまりからかつて嫌われるだけだし……………

ウデホドク

「っ……………ホッ」

そんなに見られるのが嫌なのかしら。うーん、あ、じゃあ家でやってあげよ。誰にも見られないしね。ふふっ

く八幡sideく

ふう、無事に解いてくれたようだ。危ないとこだったぜ、危うく雪ノ下らに正座させられるとこだった……………ん、二乃なんかニヤニヤしてるな。まあいいか。それより早く入ろう、噂が来る前に

ガラガラ

「あら、比企谷君こんにちは」

「ヒツキー、やつと来たよ」

「う、うつつ」

うーん、でもなんて言おうか。平塚先生から聞いているかもしれないし何も知らないかもしれない…。怒られないようにと思つたら緊張で汗が止まらない……………

「比企谷君、早く噂になつてる人を紹介してくれないかしら」

「え、もうここにも来たのか？」

噂が来るの早い。噂、恐るべし。

「クラスのグループで来てたよ。後、ヒツキーが尊敬されてたよ」

おい！なんでクラスのグループで言ってるんだよ。

俺の情報ダダ漏れじゃねえか！はあ、なんて言おうかなあ。

てか尊敬ってどういう意味だ？

「自己紹介するわね！私が中野二乃よ、よろしくね」

「中野さんね、よろしく」

「よろしくね！にのっち！」

「え？」ポカーン

「おい由比ヶ浜、さすがにそれはないぞ？あと言いにくくないかそれ？」

ア○ゴが憑依したのか？それともイノツチの派生版か？

「ええーいいじゃん！ていうか文句言うんだったらヒツキーが決めてよね！」

「決めてよって言われてもなあ……普通に二乃で良くない？2文字だし」

「2人ともそろそろいいかしら？」

「はーい」

「うっす」

まあ、なんだかんだあつたけど無事話せたぜ。途中から由比ヶ浜の目が変わっていったけど。……まあこうして二乃のテスト勉強が始まったからいいけどよ。

あと話が変わるけど近い！二乃がとてつもなく近い。色々と近い！ああいい匂いだ……

……でもこれ、小テストをやったのはいいけど点数低すぎじゃない？あと5日弱で欠点以上はいけるのか？俺、普通に雪ノ下を頼って良かったな。じゃないと俺じゃ手に負えなかった。ていうか家庭教師の人すごいな、尊敬するぜ。

「ヒツキー、二乃ちゃんとなんでそんなに近いの？」

……さあ、俺は知らないぞ？まず知ってても言わないぞ。あと昨日会ったばつかだしな。絶対知るわけない。

「さあ、知らねえな」

「八幡君ここはどうすればいいの？」

「ああここは——」

「ゆきのん、ヒツキーが……」

「タラシ谷君はほつといてあなたも勉強しましょうか」  
「ガーン」

こうして二乃（由比ヶ浜は巻き添え）の勉強会が始まった。

## 1 日目

## ④

あれから最終下校の時間まで勉強会をした。

実際に二乃の実力を見たけど、由比ヶ浜よりヤバい。もう色々。まあ頭の吸収率は由比ヶ浜より高いからいいか？

……でもテストまでに間に合うのか、これ。

と色々思いながらも帰宅した。

「ただいま」

「ただいまー、小町ちゃん」

「2人ともおかえりー。ご飯もうすぐで出来るので準備してくださいね♪」

「はーい」

「おう」

「なんで付いてくるのよ」

「いやあそこ俺の部屋だし……」

「今日たくさん勉強して疲れたわ。なんか言うことない？」

無視ですか。そうと思ったよ……まあ頑張ってたのは頑張ってたし一言くらい言うか。

「まあお疲れさん」

「はあ……ホント疲れたわ、もう一生分やったんじゃないかしらー!」

いやそれは言い過ぎだ。今日やったところっていえば、高校1年生の範囲だけだぞ？

本当は2年の期末の範囲もやらないといけないのに

「なんかご褒美欲しいなあー」

ご褒美ってまだ始まったばかりだが。まあでもこれが向こうに帰るまで続いているならばなんか買ってやるか。いや、なんでも聞くって言った方がいいのか？まあどつちでもいいか

「まああれだ、帰る日かその前日くらいまで今日みたいなのが続いていればなんか買ってやるよ」

「……………他の選択肢は無いの？」

「え？……………じゃ、じゃあ二乃が欲しいものを言ってくれ」



「わかったわ」

言った後に思い出してしまった。今、金がほぼ無いんだった。

ここは欲しいもの聞いて後で親から金用意してもらうか。

お願い、二乃みたいに金持ちじゃないから最高でも5000円くらいまでの奴を頼む

！

この思い伝わってくれ！

「1日休暇が欲しい」

ヨッシャアアアアアアアアア

!!!!!!!

伝わったぜ。でも思ってたのと違う

……

「そんなのでいいのか？何かを買うとかは？」

「休暇がいい」

ふーん、変わった奴だな。折角タダで何かを貰えるのに。俺だったら言われたすぐ後に頼むぞ？まあ俺の懐には優しいけど。

さっそく今日話した内容をまとめてみると、

金曜日（今日）

勉強会

土曜日

日曜日

休暇（二乃曰くデートだとも）

月曜日

帰宅

火曜日

テスト初日

このような日程になった。日曜日の休暇は、なぜか俺と外出する日になったらしい。どうしても俺とシヨツピングしたいと言って聞かなかつたから承諾したものの。……でも俺と行ってもそんなに楽しくないのにな。ホント、変わった奴だぜ。

あれ、後々考えてみると結局金いるんじゃないかね??

………とこうして今週の日程を決めて1日が終わっていった。

今後の整理も終わり寝ようとしていると、

「もう終わったの?」

ん?なんで二乃が部屋に来たんだろ。

寝る部屋は小町……あ、俺の部屋だったか。だから待ってたのね。早くリビングに行くか。

「じゃあおやすみ」

「ちよつと待ってよ!」

ん?なんだろ?今日はもう夜11時過ぎだし寝ないとやばいんだけど。俺が。

「八幡、一緒に寝ていい?」

は?何言ってるんだこいつ?俺にそんなことができると思ってんのか?それ以前に出会ってまだ1週間も経ってないし。

「ごめん、それは無理だ」

「……お願い、八幡!怖い」

「は?怖い?ホラー映画とかでも見たのか?」

「う、うん。だからお願い!八幡……」(上目遣い)

「っ!わ、分かったよ。今日だけだぞ?小町やあの2人には言うなよ?めんどくさくな

るから」

「分かった!」

はあ……なんで一緒に寝ないといけないんだよ。女子の隣で寝るって初めてのことなんですけど。大丈夫かな? 心臓持つかな? まずなんで一緒に寝たいんだ?

↳二乃side

言ってしまった。んー恥ずかしい／／／／

本当は、ホラー映画なんて見てないの。自分の気持ちを確認したかっただけ。八幡のことをどう思っているかを調べるために言っただけ。でも、言いながらだけどわかった気がする。多分私、八幡のことが好きなのよね。どうしてかしら。会ってまだ1日を少し過ぎただけなのに。私ってこんなにチョロかったんだ。

でも、月曜日にはもうここを離れないといけないからアタックしても遠距離。あ、八幡は私のことどう思ってるのかしら。まあ何も思っただけさそうね。言わない方がいいのかな? どうしよう。

「二乃? もう寝るぞ」

「あ、うんわかった」

よし、デートの日に想いだけ伝えよう！そうしよう！

く八幡 side く

—— 次の日 ——

う、やばい。またこの夢だ。二乃が来てから2回目。なぜだ？今まで夢には出てこなかったのに。もう苦しい！しんどい！

はっ！………起きてしまった。まだ朝の5時なのに。今日土曜日なのに。…あ、勉強会か。上杉っていうやつにプリント送ってもらうか。家の電話FAXあったっけ？まあどうにかなるだろう。それにしても二乃の寝顔可愛いな。

……ん？なんで俺はこんなこと思っているんだ？ま、まさか会って2日目の女子に恋とかしてないだろな、俺。まあしてないよね？……あれ大丈夫だよな？さすがにそれはやべえぞ、俺。

よし、このことは忘れよう。二乃が起きるまでに勉強会の準備でもしとこうかな。

デートの日の日曜日まで残り1日

## 2日目 ①

今日は最初で最後の勉強会だ。まあ千葉での勉強って意味だけだな。地元帰ったら多分たつぷり勉強やらされるだろう……今日の朝方に送ってもらったPDF（FAXは無理だった）を使って最後の多分楽しい勉強会を開催してやるか……ふふふつ「なに笑ってるの八幡？」

「お兄ちゃん……キモイよ？」

え、笑ってた？マジかあ、そんなつもりなかったんだけど……。まあ勉強を教えるのが楽しかったのかな……多分。

ていうか妹よ、キモイとか言うな。泣いちやうぞ、俺。

あーあ、もう明後日で二乃は帰るのか……なんか寂しいな。……ん？あれ、なんでそんなこと思ってるんだろ。

なんていうか???チヨロいな八幡。

「お兄ちゃん、朝ごはん食べるから早く降りてきてね！二乃お義姉ちゃん行こー！」  
「そうね……て、なぜまたお姉ちゃん呼び???ていうか、また字が違くない??」

「まあまあ気にしない気にしない……そういう事だから早く来てね、お兄ちゃん」

「ほーい」

まあ気にしないでいくか。あ、今日の勉強会はアイツらも呼ぶか、最後になると思うし……………よし、送信つと！じゃあ飯食いに行くとしますか。

〜10時〜

「良かった……………今日で勉強会は終わりね」

「何言ってるんだ？ここでは終わっても帰ってからテスト始まるまでちゃんと勉強しとけよ」

「……………なぜ？」

「はあ……………」

なぜ？ってどういうことだよ…普通のことだろ。どんだけ勉強嫌いなんだよ。家庭教師の人がなんだか可哀想になってきたぜ。うーんどうしたら向こうでも勉強してくれるのかな??ちよつとここはあれをダシにして言うか

「もし、帰ってからやらないんだったら明日は行かな「わかった!!帰ってもやるからそれは……………やめて……………」いよう……………」

なんで泣くんだよ。そんなに明日楽しみなのか？

俺の事好きすぎるだろ。まあそんな訳ねえだろうけど。

「はあ、わかったから泣くな。可愛い顔が台無しになるぞ。明日二乃の行きたいところ連れてやるからさ……欲しいもの買ってやるから。な？だからもう泣くなよ」

まさか泣くとか思ってもみなかった。なんか悪いことしちゃったな……。違う意味で逆効果だったな。と思いつながら、二乃の頭を撫でてたら、2人が入ってきたのに気づかなかった。

「あ、ヒッキー……にのつちのこと泣かしてる」

「誑し谷君、あなた二乃さんを泣かしてどうするつもり？」

「お兄ちゃん……Go for it!」

「ええ……」

めつちや誤解なんだけど……。ま、まあ泣かしたことには変わりないのか。

っておい、雪ノ下。誑し谷ってなに？俺、誑す相手いると思う？

あと、小町はなぜ最後英語なんだよ。なにを頑張ればいいんだよ??

まあ色々あったけど、勉強会の始まりだ！

〈勉強会〉



「よし、今日最後の課題はこれだ」

「え、これって……………」

そう、俺が渡したのは上杉風太郎という家庭教師が作ったプリント。

二乃のお父さんに頼んでパソコンに写してもらい、PDFにして送ってもらったもの。最初は、上杉風太郎に却下されたけど、俺が「勉強を教えるのが苦手なんだよ！あと、範囲もほぼ知らないし、俺流でやったら二乃の成績下がるけど、それでもいいんだな？」って言ったらすごい低い声で「……………わかった」っていう感じで許可してくれたぜ。ヒヤヒヤしたけど笑

「二乃はこの字に覚えがあるだろ？家庭教師お手製の対策プリントだぜ」

「……………」

「プリント？ヒツキーいつの間……………」

「比企谷君にしてはやるわね……………」

「……………まあ嫌なのはわかる。だってこれが原因で家出てきたもんな。……………でも俺さ、どうやったら二乃の点数が上がるようになるかなって考えたとき、これしか思いつかなくてな。家庭教師は勉強教えたりするのが仕事だろ？素人の俺に比べたらよっほ

どのプロじゃん?……まあ、俺はどつちでもいいけどな。家庭教師のプリントをやりたくないんだったら別にやらなくてもいい。やりたかったらやってもいい。でも、俺は一切強要しない。やらなかったっていう理由で明日のデートは無くならないしな。……何度もうけど、自分がやりたいんだったらやればいい。やりたくないんだったらやらないでもいいし、俺の部屋に籠って遊ぶなり昨日やった復習だけするなり自分のしたいことをやれ。今日の勉強会の内容はそれだけだ。」

「……………」

やべえ。めつちや長く喋つちやつた。由比ヶ浜と雪ノ下は途中からポカーンしてるし、二乃も下向いたまま反応が無いし、小町はキッチンの方に途中まで居たけど今はどこにも見当たらない。こんなに熱心に長く語つたのは超が付くほど久しぶりだしめつちや恥ずい。俺が部屋に籠もりたいわ

〈二乃side〉

八幡からあいつ、上杉風太郎が作ったプリントを見せられたときはとても驚いた。だつて家出した原因のプリントだったから。

あと、八幡の家では出てこないと勝手に思ってたから。

でも、八幡の言葉を聞いて私の成績の事を思つてやつてくれたからか、イライラすることはなかった。

〈勉強中〉

結局私は、上杉が作ったプリントをした。やつてみてわかつたことは、ほとんど私が間違つた問題がこのプリントたちに出ていたこと。上杉つて結構凄かつたのね。上杉の家庭教師の熱意がわかつた気がする。勉強つて意外と面白いのね。家に帰つた時はきちんと謝ろう。

ところで八幡たちは、私が勉強している隣で「へえー、問題全部手書きなのか。すごいな二乃の家庭教師は」などと雪ノ下さんと由比ヶ浜さんの3人で話したりして、3人の空間を作っていた。

ちよつと！わからない問題聞きにくいじゃない。あと近い！八幡と雪ノ下さんたちの距離（物理的）が近い！私も入りたい!!!

というか雪ノ下さんと由比ヶ浜さんは、八幡のことが好きなのかしら？でも、私も八

幡のこと好きだしデートの時に告白しようとも思ってるし??? いや、やっぱり私が告白とかは辞めといった方が良さそうね、この感じは。だって絶対勝てそうにないもの。急に現れた人が勝てるわけがない。

告白したいけど、断られる未来が見えて怖い。あと、初恋の人に嫌われたりするのはいやだし拒まれるのもいや! もういつその事、片思いのままでもいいかな???

あ、どうしよう。デートの時に告白するって考えてたけど、告白しないならもうデートも要らないんじゃないかしら。あとでデート要らないって言おうかな??。

っ!?! 目から涙が出てきたってことは、やっぱり私、八幡のことが好きだったのね。なんかチヨロかったわ、私。会って1週間もしないで好きになるなんて???。て、やば! 流石にここで泣くわけにはいかないわ。トイレでも借りよう。

「ちよつと、八幡。トイレ借りるわね」

「ん? いいぞ。場所わかるか?」

「小町ちゃんに聞いたからわかるわ」

「そうか。トイレのあとでわからないところあったら教えるぞ?」

「わかったわ。じゃああとで教えてね」

早々と会話を終わらし、トイレに入った。

やっぱり涙は我慢できなくて座ってすぐに涙が出てきた。

「やっぱ？り???ここく?はく?せず?に?終わる??恋は?????キツい?わ」

そうして私は、トイレの中で1時間弱泣いてしまった。

## 2日目 ②

「二乃、長かったけど大丈夫か？」

ダメだ。1時間も泣いたのに全然泣き足りない。今は収まったから勉強しに戻ったけど、また胸が苦しくなる?。はあ、なんで八幡に恋してしまったんだろ。住んでる場所も違うし、これから先会うことも無いのになんてかなあ。あ、でもそれだったら、告白して振られた方がまだマシなのかしら???

「おーい?」

あー!でも拒まれるのは嫌。??もうどうしたらいいのよ!

「二乃???しんどのいのか?泣いたあとがあるけど」

「わあっ!ちよ、ちよつと急に喋らないでよ!驚いたじゃない」

「いや、さつきから呼んでるんだが??」

「で、なに?」

「いや、だから、泣いたあととあるけど大丈夫なのか?って聞いてるんだよ」

嘘??。泣いたあととできてるの???まあ1時間泣いたら出来るか。ってなんでここにいるの?リビングにいたはずなのに。

「??もうトイレ終わったか?入りたいんだが」

なんだ?。そういうことね。私を心配して来たんじゃないよね。

あ、どうしよう。この顔であの2人に会いたくないな。見られるの恥ずかしい?。よし、八幡の部屋借りるか

「八幡!ちよつと目の赤み治るまで八幡の部屋居といていいかな?」

「??あー、そういうことか。いいぞ」

「ありがとね」

く八幡 side く

二乃がトイレに入ってから1時間も経った。大丈夫か二乃のやつ。あとで見に行くか。それにしても、結構問題合ってるじゃねえか。とところどころ空いてるけど。まあそこは後で教えるか。

「ヒッキー、にのつち大丈夫かな?」

「ん?大丈夫だぞ。ほれ、問題ほぼ合ってるし」

「わあーすご!?!?ってそつちもあるけど今はそつちじゃないし!トイレの方だよ」

「あー、大丈夫なんじゃね?まああとで見てくるよ。ってお前は自分の勉強のことを心

配しろよ」

「さ、さつきまで頑張ってたし！もう疲れたよー！」

「本当か??」

「由比ヶ浜さんも意外と頑張ってたわよ。意外と」

「ちよつとゆきのん、なんで2回も言ったの??」

「ごめんなさいね、つい口が滑ってしまったわ」

「もー」? ( ?、 ^、 ? ) ?

「ここはもうすぐでゆりゆりな空間になりそうだなあ。まあもう見慣れちゃったけど。つーか、マジで二乃遅すぎないか? トイレにそんなに時間掛かる?」

「なあ二乃流石に遅すぎないか?」

「そうね?。流石に女子でもこんな時間は掛からないわ」

あ、やっぱり掛からないのね。うーん、じゃあトイレじゃないことをしてるのか? トイレであれ以外のこと??? うーん、なんだろう。泣いてる??とかか? でも、そんな素振りなかったしな。気になるし見てくるか。

「トイレ出てるかどうか見てくるわ」

「お願いヒツキー！」

「お願いね比企谷君」



さてさて、二乃は出てるのかな？流石に出てないと心配になるし、俺の膀胱も限界になる。

お、いたいた。ってトイレのドアの前でなにやってるんだよ。出てるなら戻ったらいいのに。

「二乃、長かったけど大丈夫か？」

「????」

あれ、おかしいな。全然返事が来ない。それも目が合わない。俺の方向見てるのに目が合わないってどういうことだよ。

「おーい?」

「????」

ん?こいつの目、トイレ行く前より赤くないか?もしかして予想したように泣いてたの?なぜだ?泣く素振りもなかったし、泣く要素もない。どんな理由で泣いたんだ?あ、もしかして女子の日のやつか?なるほど。声が出ないほど痛いのか。それとも単純に知らない環境に酔ってしんどくなった?まあ聞いてみるか。

「二乃、しんどいのか？泣いたあとあるけど」

「わあっ！ちよ、ちよっと急に喋らないでよ！驚いたじゃない」

うえ！声大きいしうるさい。耳の近くで大声出さないでくれよ？。まあ俺が二乃の顔に近づいたから自分のせいでもあるんだけどね（？>？・・？）テヘ

つーか、顔近づけるまで反応無いかとどんだけ集中してるんだよ。悩み事か？それしかないよな。泣くほどの悩み事か？？ダメだ、全然わかんねえ！あとで小町に聞いてみるか。

「いや、さつきから呼んでるんだが？？」

「で、なに？」

「いや、だから、泣いたあとあるけど大丈夫なのか？って聞いてるんだよ」

心配で見に来た？？？って言うところだけど、俺はそんなイケメンなことには言えない。つーか、赤くなってるたの知らなかったのかよ。目見開いた後すぐに頭抱えだしたし？？。

「？？もうトイレ終わったか？入りたいんだが」

ん？なにかを考えてるのか？まあ考えるのはいいけど、俺さつきトイレ行きたいって言ったよね？？そこで考えられても困るんですが？？。

「八幡！ちよっと目の赤み治るまで八幡の部屋居といていいかな？」

なんでそんな事聞くんだけだあ、雪ノ下らに見られたくないのか。女子同士だったら気にしないと思うけどまあいいか

「あー、そういうことか。いいぞ」

「ありがとね」

「???」

絶対泣いてたな、あれは。だって泣いてなかったら、2階に行く時あんな悲しい顔しないだろ。流石の俺でもわかるぞ。???多分。よし、小町にメールで聞いてみるか。ん?なぜメールかって?だって、小町のやつみんなが来たらすぐに友達の家に行っちゃったんだもん。なのでメールで聞きます。電話だと聞こえたら困るし

『二乃が多分泣いちゃったんだけど、どうすればいいんだ?』

『え、二乃さんを泣かしたの?』

『違う。勉強中にトイレ行ってくつて言つて、それから1時間以上がたつたから見に行つたら泣いたあとがあつたんだよ。あとトイレ出てからは、悲しい顔しながら俺と喋ってるからどうすればいいか気になってしょうがねえんだよ』

『なるほどねー。二乃さんって結構お兄ちゃんに似てるね』

『は?どこがだよ。全然これっぽっちも似てねえじゃねーか』

『まあお兄ちゃんには多分分らないから置いて、とりあえず今日一緒に寝たらどう?』

『ん?なぜそういうことになる?』

『まあ小町を信用してくださいな。恋にはね、色んな恋があるんだよお兄ちゃん』

『??信用はするけど、恋は今関係あります? いらぬよね?』

あれ? 既読無視ですか小町ちゃん。急に止まらないでくださいよ。こっちは真剣に聞いているのに!?? つーか一緒に寝るだけで解決するのか? しなさそうだけど。まあ断れたら俺は普通にソファで寝ればいいだけだな。

よし、早く戻ろう。あいつらも気になってると思うし

くりびんぐ

「戻ったぞ」

「ヒツキーおかえりー! にのっちはどうだった?」

あー、これは言わない方がいいよな?

「あー、なんか眠たいって言ってたからとりあえず2時間くらい俺の部屋で寝てもらおう」とにした」

「ふーん、そうなんだ。良かった元気そーだね」

「そうね???ところで比企谷君」

え、なに、バレた?ま、まあ雪ノ下にはバレちゃうか??こんな嘘は。うーん、どうしようか

「比企谷君?」

「は、はい!な、なんででしょうか?」

あ、やべ。余計バレそう。なんでテンパっちゃうんだよ俺は!

「今、17時30分だけど私たちは帰った方がいいかしら?」

あ、そつちか。良かった??。つてもうそんな時間???二乃大丈夫か?まあプリント一通り出来てるから大丈夫かな???

もう時間も時間だし、帰ってもらうか

「そうだな。もうこんな時間だし終わるか勉強会。もうすぐ夜だし送るぞ?」

「え、ヒツキーが優しい???」

「あら、あなたからそんな言葉が出るとは、明日は槍が降るのかしら」

「なんだ2人とも。俺をなんだと思ってるんだ?」

「捻くれヒツキー」

「自己犠牲捻くれ谷君?」

おい! どういうことだ!?

由比ヶ浜は俺の事捻くれヒツキーだと? どこが捻くれてるんだよ! 捻くれてねーし、どストレートだし(?)

雪ノ下は俺の事??? いや、自己犠牲つてまあ本当のことだからあまりツッコめないけど、苗字ね? なんでも谷を付けらればいいと思つてない? ね?

「はあ??? そんな事言うんだつたら送らないぞ?」

「気持ちだけ受け取つとくわ。もう車が来てるの。だから心配しなくても大丈夫よ。」  
「そ、そうなのか」

いつの間に車での迎えを頼んでたんだよ。準備するの早いな

「じゃあおつかれ。また学校でな」

「またねヒツキー!!!」

「比企谷君、二乃さんのことよろしく頼むわ」

「はいよ……………」

結局帰るまで二乃は下に来なかつた。まあ多分なにかしてるんだろなあと思いつつ、もうすぐで晩御飯なので起こしに行くことにした。あ、小町いらないから俺が作らな

いとイケないじゃん。どうしよう……まあ適当に作るか。と、思いながら扉を開けると、二乃が床で寝ていた。ん？いや、寝ているにしては顔が赤い。ま、まさか……辞めてくれよ。

「おい二乃！大丈夫か？つーか熱っ！……まじかよ。つてやばいやばい。早くベッドの上で寝させないと」

嫌な予感的中。二乃は熱を出していた。

俺は急いで二乃を俺のベッドの上に乗せた。まあ嫌だと思うけど世間一般でいうお姫様抱っこをして。しょうがないじゃん？それしか運ぶ方法がなかったんだもん。

そして、熱さまシートや小町の部屋にあった救急セット、アク○リアスなど準備をした。小町にもメールをして、早く帰ってもらうようにした。ついでに中野マルオさんにも電話した。焦ってるのか、向こうでなにかが落ちた音がしたけど。

まさか帰る2日前にこんなことになるとは、誰一人も予想出来なかった。

〈二乃side〉

八幡に部屋に行くことを伝えてから、上に行つた私は少し八幡の部屋にあったラノベ

を読んでいた。そして、気がいたら17時50分という数字を見て、やばい早く降りないとのあの2人帰っちゃう、と思いきや起きてみると、なぜか頭が痛くて身体もふわふわする。急に頭が回らなくなったので、下へ行くために部屋の扉まで歩こうとしたがすぐに倒れてしまった。

「痛っ……………」

あー、これ熱だわ。めっちゃ頭痛いしクラクラする。なんでさっきまで本を読めてたのかしら。……………どうしよう。声も急に出せなくなつたし動けない。あれ？私詰んだ？

あ、足音が聞こえる。八幡かしら。

「おい二乃！大丈夫か？っーか熱っ！——」

あ、私のこと心配してくれてる。ありがたい……………。あれ、急に体が浮いた……………っってお姫様抱っこ??あー、ずっとこのままが…って私つたらなに考えてるのかしら。熱のせいで変な考えになつてるの？危ない……………このままいくと変な考えがずっと続きそうだし、思つてることも口でペラペラ喋りそうね。

あれ、眠たいのか目が重くなつてきたわね。やばいわ、なにも考え——Zzz……………

「寝たか……………今日は詰め込みすぎたな。ん？俺カレンダーにこんな丸付けたっけ？



………あー、二乃が書いたのか。楽しみにしてたもんなあ。まあこのままじゃ無理そうだな」

うーん、なんかデートの代わりになるようなものつてあるのか？あとで探さないとな………。二乃はよっぽど疲れたのか、熱のせいなのか分からないけれど、あれから7時間経つまで寝ていた。

## 2日目

## ③

あれ、私はなにしてたのかしら？目の赤みを消すために八幡の部屋に行つて、そして……あれ？ここから記憶が無いわね。なぜかしら？

ん？目の前には天井……？てことは、今ベッドの上で寝てるの私???やば！早く起きないと

「痛っー!」

頭が痛い!そして顔熱い!……なんで?ま、まさか私熱出ちゃったの?え、ちよつと待つて。ということとは、明日のデートは行けないのかしら?いや、でももう告白は……つて今の時間は?

「え!もう11時なの??!」

「うえっ!うるさっ……なんだ起きたのか。熱はもう大丈夫なのか?」

は、八幡?な、なんでこの部屋で寝てるの?

「なんでここに居るの?」

熱のせいなのか、いつもの口調ができない

「ん？なぜか？……まあ俺のいない所で倒れられても困るしな。あと元々俺の部屋だしここで寝ても別にいいかなあと思って」

「そう……」

ダメだ、考えることもしんどい。もうこのまま勢いに任せよう

（八幡 side）

ん？なんか二乃の反応がいつもと違うな。まあ熱あるししようがないけど。でも二乃の起きるタイミングが悪いな。寝てる時に起きるとは……。起こしても起きないからってつきり明日まで寝ると思ったのに。

「八幡、服変えたい」

「え？そ、そうか。小町のしかないけどそれでいい——っておい！今脱ぐな！」

急に服変えたいって言ったそばから普通に脱ぎだした。あれ、俺の事見えてる？なんで目の前で脱ぐの？この人は

「ふえ？暑いから早く変えたいのだけど」

「わかった！わかったから少し待ってくれ。まだ服用意出来てないから！」

「早くして、そこにある服でいいから」

え、いや、それは俺がさつき寝る前までに着ていた服で、起きてから洗濯機に入れよ

うとしてたやつなんだが？いや、さすがに汗やばいし、汚いし、あとまず俺が恥ずかしいから嫌だし。

「それ、俺がさつき着てたやつだから、ちよつと待つてろすぐに戻つてくるから」

「なんでそれがダメなの？早く変えたいしいいわよね？」

と言いながら、二乃はなにも躊躇わずに俺の服を取つて着ようとしたので、

「いや、ちよつと「い・い・わ・よ・ね？」……………はあ、あとで怒つても知らないからな」  
無理でした。止めようとしたけど、圧に負けちゃった。あれ？俺つて熱出てる人に圧で負けるの？弱くない？

「ん……………」

「いや、だからまだ俺がいるのに脱ぐなよ！出るまで待て！」

「なぜ？」

「は？」

「八幡、濡れタオルで拭いてほしい」

「……………」

もう諦めよう、あまり話も噛み合つてないし。ん？よく見たら二乃のやつ目は充血してるわ、目の中心が定まってないわでなんか危なっかしいな。よし、二乃の言われるままにするか。俺の理性耐えてくれよ。

うーん、まずタオルを濡らしてからここに持つてくるか。移動するのもめんどいし、2、3枚用意するか。はあ、色々と初めてのことが多すぎてもうわかんねえや。まあ小さい時に小町でこういうのは経験済みだけど、またそれとは意味合いが違うんだよなあ。

スポドリも薬もついでに用意しとくか。

「二乃。タオル持つてきたから、壁の方向いてくれ」

「ん……………」

よし、拭くか。おお、小町の背中とはまた違う感じなんだな。でも、小さいな。まあ女子だから小さいか。よし！一応俺が拭ける場所は終わったぜ。ふう、なんか疲れてきた。これ終わったら寝るか

「二乃ー、終わったぞ。前は自分でやれよ」

「ありがと八幡！」ニコツ

「お、おう…。」

二乃つて雪ノ下みたいな口調とツンデレが無くなったら可愛いしか残らないんだが。これ、全世界の男子は惚れて告つて振られるところまでいくぞ？まあ普通に、可愛い・美人の枠組みに入るからなあ、こいつ。

「八幡?」

「つーか、こいつこんなに可愛いんだったら彼氏いるんじゃないやね? あ、やばい。これがバレたら俺死ぬじゃん。」

でも、まあ、俺みたいなやつは女子の背中見ることすらないから、これで殺られてもいいか。いや、良くねえな。普通に彼女欲しいし、まだ見れてないラノベもあるし。」

「ねえ、八幡。」

「ん? なんだ?」

「……………明日のデートってどうなるの?」

「まあそりや聞きたいよな。そのために勉強張り切ってたし。でも、熱が治まるまで無理だな。」

「熱がまだ38度あるから明日は無理だな」

「そう……………」

「まあ治ったら買い物や映画くらいなら付き合うぞ」

「うん……………わかった。おやすみ八幡」

「おうおやすみ。」

ふう、色々あったけど、二乃も寝たことだしタオル片付けて寝るか。あ、二乃の服は洗濯機に入れるだけで明日の朝洗濯するか

「八幡大好き」

「は？」

「Z z z……………」

……………は？え、ちよつとどういうこと？起きてるのか？それとも寝言か？え、でもこんなに早くには寝れないし……………。どっちだ???うーん、よし、一旦忘れて早く寝よう。明日も看病しないといけないしな。さっきの言葉は明日考えるとするか。あ、上杉に連絡したっけ?……………多分やってないし連絡しとくか。

く二乃 side く

なんか八幡顔赤くなつたけど、なんでだろ？私なにも言っていないと思うけど

『八幡大好き』

へ？なにこの記憶……………。ま、まさか思ってた言葉が出たの？うわ、最悪。言わないでおこうと思つてたのに。決心していたのに！なんで熱の時つて思つてる言葉が口に出やすいのかしら。

……………どうしよう、流石にあれを言ったら逃げられないわよね。もうここは当たつて碎

けろってこと？もう熱の勢いで告ろうかしら。あ、でも、八幡ってあーいう性格だから信じないだろうなあ。やっぱり帰りの時に言うしかないのかな。ん？なんか八幡が電話してる。

『あ、上杉か？ちよつと言っておきたいことがあつてな。二乃が熱出しちやつただけだよ——』

上杉……？あー、私のことを報告してるのかしら。

『大丈夫だ上杉。ちゃんと上杉のプリント8割くらい正解してるぞ』

まあ私には関係なさそね。

『明日はあまり無理させるなよ。二乃の今回のテストは比企谷にかかっているんだからな』

「わかつてるって。熱の具合にもよるけど、多分明日も無理そうだな」

『そう……なのか。じゃあ明後日も無理そうだな』

「そうだな。でも、明後日の午後に車で迎えに来るんだろ？マルオさんが」

『まあそうだけだよ……。あ、もうこんな時間じゃねえか。勉強するから切るぞ』

「いや、はよ寝ろよ。そうだ、上杉って女子5人の家庭教師なんだろ？」



『ん？ そうだがそれがどうかしたのか？』

「いや、ただ俺と違って上杉はリア充なんだなあと思つて」

『は、どこがリア充なんだ？』

「え、いやいや、5人も女子いるんだろ？ その中の誰かと付き合つたりとかしてるじゃないのか？」

『なんで俺が付き合つてると思つたんだ？ まず、恋は学業からもつともかけ離れた愚かな行為だ。したい奴はすればいいだけだ。だがそいつの人生のピークは学生時代となるー！』

「そ、そうなのか……」

『ま、まず全員性格がアレだから俺には合わん』

「ん、そうか？ 二乃とかは口調がアレだけどめつちや可愛いじゃねえか」

『は？ 二乃が？……それは無いわ。あいつ初めての家庭教師の時に、俺に葉盛つたんだぞ。可愛いどころか恐怖でしかないわ』

「ほーん、そんなことがあつたんだな。全然そんなことしなさそうだけど……」

『まあ病人だからな。今もししようとしてもする元気がないだろうよ。ていうか比企谷くそ二乃のこと襲うなよ？』

「……………は？ 襲わねえよ、なんで病人を襲わないといけないんだ」

『病人じゃなかったら襲ってるんじゃないかね？二乃のこと気になってるだろ？急に来た家出少女と普通に接したり、その子のために勉強教えたり教材送ってもらうことするか普通。教えるのは教えても、教材送ってもらうようにするのはしないな。俺だったら。』

「もしそうだとしても、気になってる人を襲わねえよ。俺をなんだと思ってるんだ？」

『知らん』

「は？知らんってどういうことだよ！——」

うるさいわね。いつまで喋ってるのかしら？頭に響くから静かにしてもらえないかしら。

「はちまん……………しずかにして」

やっぱりまだ声が少ししか出ないわね……………

「え、起きてたの？……………わかった切るわ」

『え、ちよつとま』ピッ

「ごめんな、うるさくて」

私が言ってから、八幡はすぐに消してくれた。上杉はなにか言いたそうにしてたけど。そして、謝りながら頭を撫でてくれた。

”ずっとこの時間が続けばいいのに、  
私は寝るまでずっとそう思っていた。

## 3日目

## ①

あーあ、昨日の夜はなんであんなこと言ったのかしら。告白するつもりなかったのに。多分あの感じ聞こえてるわよね……。

あれ、ていうかなんで周りこんな真つ白なの？……夢の中なのかしら。身体も動かないし声も出ない。……なぜか目の前に八幡とあの2人がいるわね。

あ！私がトイレで泣く前の場面だ。あれ、でも、なんでこのシーンが夢に出てくるのかしら？

あ、また涙が流れてきそう。早くトイレに行かないと……ってそうだ身体が動かないんだったわ。やばい、みんなの前で泣くことになっちゃう。夢っていうことはわかってるけど、なぜかここに居たら行けない気がする。

八幡の隣に雪ノ下さんと由比ヶ浜さんが座って……みんな私のことが見えてないのね。こんなに関近で泣いているというのに。やっぱり私が入るスペースは無いのね……。

あーあ、八幡と幼なじみだったら違ったのかしら。この運命には抗えないのね……。

く八幡 side)

うー、はあスッキリしたな。ん、まだ5時30分なのか。よし！二度寝しよう！

「は……………」

ん？うなされているのか二乃のやつ。うーん、どうしよう……………。あ、俺も初日うなされてたつて言ってたな。じゃああの時二乃がやっていたことをすればいいんじゃないか。ねえか。

あの時二乃がしてたのは……………膝枕……………？

チツ、参考にならねえじゃねえか！俺がそんなこと出来るわけないだろ。そんな簡単に出来たら今までに彼女できてるわ。(多分)

誰かに言われるか小町に言われるかくらいじゃないとできないね (☒?☒)  
「は……………ちま……………」

……………はあ、まあこの前のお礼としてやるか。

ただのお礼、そうただのお礼

よし、準備完了だ。あとは起きるまで膝枕しとくとの頭を撫でておくか。

ガチャ……

「ただいまあー！お兄ちゃんk「シ——ツ」……………ゴメンオニイチャン」ガチャ

危ねー、まだ6時前なのに起こすとこだったぜ。小町よ、わかってくれて良かった。あと、気になるのは帰ってくる時間おかしくないか？朝方に帰ってくるってお兄ちゃん心配だよ……………。

ん？二乃どんな夢見てるんだ？泣いてるじゃねえか。たく、どんな悩み事があるんだろ。やっぱり今日行けないことで悩んでしまってるのか？まあ後で聞いてみるか。

「つーか、ほんとに可愛いな二乃って……………」

「……………」目。パチリ

「……………」

「……………」

「……………き、聞こえた？」

「……………聞こえたわ／／／／／」

「そ、そうか……………／／／／／」

「あれ、なんで八幡の顔が目の前にあるの??」

「ああ、それは俺がうなされてた時のお礼として同じことしてるからな」

「八幡がうなされていた時にしてたってことは……膝枕??え、なぜ?」

「そりゃあ、二乃がうなされてたからだ」

「そ、そうなのね……。あ、熱測りたいわ」

「今手で触ったけどもういけると思うな。ほい、体温計」

「ありがとう」

あの後測ったら、37.5℃だったので今日のデートは一応無しって言ったら、「そう………わかったわ……」みたいな感じになってたわ。会ってから一番楽しみにしていたからなあ、デート。まあテスト期間中にまた熱ぶり返しても困るし、しょうがないんだけど。まあ代わりのものを用意するか

「ねえ、もう私元気なだけでまだ寝ないといけないの?」

「うーん、寝なくてもいいけど家からは出せないな。まだ微熱だから」

「そう………」

「あー、デートの代わりなだけどき……」

「うん……」

「明日のこれくらいに時間に起きて午前中に外出しないか？熱無かったら話だが」

「行く!!絶対行きたいわ!!!」

「お、おう。そうか。じゃあ行く場所決めないと。朝早いから場所は絞られてしまうけど、それは我慢してくれ」

「分かったわ!……:……じゃあミニデートのメはプリクラがいいかしら?」

「おう、本当は嫌だけどいいぞ。二乃の為だしな」

「ありがとう!」ギュー

予定はめっちゃ変わったけど、まあ喜んでくれて良かったわ。小町にも聞いた甲斐があるぜ!ありがとよ小町!

あと無視しようと思つたが、二乃よ。そんなにくつつかないでくれると八幡嬉しいな。匂いが良くて理性持つかわかんないゾこのやろー。